

# 問題行動とコミュニケーション：児童養護施設におけるソーシャルスキル・トレーニングの実践と成果

著者	宮内 俊一
抄録	<p>児童養護施設に入所してくる子どもたちは、被虐待児が多い。虐待環境下で育った子どもは、感情・衝動のコントロールがうまくできないため、様々な問題行動を繰り返すことが多い。被虐待児や発達障害児はコミュニケーションがうまく出来ず、いじめや喧嘩など、人間関係でトラブルを起こす傾向がある。このような多くの問題を内在した子どもたちであっても、生活環境を整え、コミュニケーションの方法を学習することで人間間の関係性が修復できることを実証した。</p> <p>The majority of children admitted to foster homes have ever been abused. Children who have been raised in the abuse setting are likely to repetitively have various behavioral problems because they cannot their emotion and they yield their impulses. Maltreated children and developmentally-disabled ones lack in communication skills, so they tend to create such problems in human relations as bullying ...</p>
雑誌名	紀要
巻	7
ページ	37-44
発行年	2013-03-31
出版者	名寄市立大学
ISSN	18817440
書誌レコードID	AA12272535
論文ID (NAID)	110009560098
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1088/00000190/">http://id.nii.ac.jp/1088/00000190/</a>



# 問題行動とコミュニケーション

## 児童養護施設におけるソーシャルスキル・トレーニングの実践と成果

宮内 俊一\*

名寄市立大学短期大学部児童学科

【要旨】児童養護施設に入所してくる子どもたちは、被虐待児が多い。虐待環境下で育った子どもは、感情・衝動のコントロールがうまくできないため、様々な問題行動を繰り返すことが多い。被虐待児や発達障害児はコミュニケーションがうまく出来ず、いじめや喧嘩など、人間関係でトラブルを起こす傾向がある。このような多くの問題を内在した子どもたちであっても、生活環境を整え、コミュニケーションの方法を学習することで人間関係性が修復できることを実証した。

キーワード：虐待、いじめ、コミュニケーション、ソーシャルスキル・トレーニング、セカンドステップ

### はじめに

全国の児童相談所が平成23年度に対応した虐待相談の件数は59,862件（速報値）で、集計を開始した平成2年度から21年連続で増加し、過去最多を更新した。

近年、児童養護施設に入所してくる子どもたちの大半は被虐待児であり精神疾患様の状態を呈していることが多い。コミュニケーションがうまくいかず対人関係がとれずトラブルになっていくことが多々ある。自分の気持ちを相手に伝えることができずにイライラしてしまう。相手の気持ちも理解できずにいじめや喧嘩になるという現状がある。コミュニケーションは人と人がお互いに意志・感情・思考を伝達し合うことである。白石大介(1988)は、心と心が触れ合って、人格と人格が交わる中で、共感し合い理解し合うということであると述べている。楠凡之(2002)が、児童虐待は子どもの自我や人格に及ぼす影響が大きいと述べているように、虐待によりコミュニケーション能力の発達が阻害されるということは、人格の成長に影響すると言える。また、このような子どもたちと関わる職員は感情労働による感情の疲労や、傷などを癒すことがうまくできずにいる。筆者が勤務していたA児童養護施設（以下、A施設という）の職員も子どもたちからの悪口や罵

声で、気持ちの切り替えができずにバーンアウト寸前であった。このような状況の中、筆者は職員とともに、子どもたちのコミュニケーション能力に焦点を当てて、ソーシャルスキル・トレーニングである「セカンドステップ」の技法を取り入れて、実践して分析を試みた。

### 研究の背景

厚生労働省雇用均等・児童家庭局による児童養護施設入所児童等調査結果の概要（平成20年2月1日現在）によると児童養護施設入所児童で被虐待経験者は53.4%である。A施設の入所理由では、平成17年1月現在すでに虐待が全体の57%強を占めている。しかし保護者の行方不明、拘留、遺棄、精神疾患等を含む虐待環境下で生育した児童は85%に及ぶ。児童福祉法28条（親の同意が得られず家庭裁判所の承認を得て施設入所した）適用児は13%にもなる。発達障害及び精神神経系疾患は43.9%である。個別に見ていくと注意欠陥多動性障害(ADHD)、心的外傷後ストレス障害(PTSD)、行為障害、アスペルガー症候群、脳波異常、発達障害などであった。心理治療を必要とする児童は63.4%で、担当児童相談所に施設職員と共に通所して個別心理療法を受けている。または施設内において、心理担当職員による個別・

2012年8月29日受付：2012年12月21日受理

\*責任著者

住所 〒096-0011 北海道名寄市西1条南4丁目3番地1  
E-mail: shun-miya.7.7@nayoro.ac.jp

グループによる心理治療などを実施している。子どもたちは職員の神経を逆なでするような言動、「死ぬ」「馬鹿」「むかつく」等の暴言、時には蹴る、物を壊す等の暴行、破壊行為等の問題行動が多い。

このような子どもたちは、比較的安定している子どもたちにも影響を与え、巻き込んでいく。職員は子ども個人の対応だけでなく、集団化してしまう子どもたちの対応では收拾がつかない状態があり、「病理集団化」(黒田郁夫 2005)して、四苦八苦ししていた。施設内だけでなく、通学している小学校、中学校の地域の子どもたちにも影響を与え、教員や保護者から苦情があった。平成16年当時、小学校でいじめについてのアンケートが行われた。プライバシーの問題があるので具体的な公表はなされなかったが、本施設の子どもたちが関係しているということで、同年に本施設内でいじめのアンケートを実施した。

筆者が担当していたB生活寮(A施設は大舎制の3寮体制)の小学1年～6年生の18名から回答を得る。「いじめられたことがある」と答えた子どもは18名中17名であった。「内容」(複数回答)は「悪口やからかい」が17名、「いたずら」が14名、「いじわる」が12名である。特徴的なのは「いじめられてどうしたか」は、「黙ってやられていた」が9名である。「誰に相談したか」は「だれにも相談しないで我慢した」が12名である。職員や友人に言えない現状があり、コミュニケーションの乏しさと対人関係の複雑さも窺えた。「いじめたことがあるか」は10名が「ある」と答えた。「生意気だから」(6名)、「いい気味だ」(4名)とと思っていることに特徴があり、他人を思いやれない児童が多い現状である。

楠凡之(2002)によると被虐待児は、いじめにあっても「嫌だからやめてほしい」と訴えることや、大人に助けを求めることが困難であり、心身が硬直した状態になってしまうという。被虐待児は他者との関係で自分の意志や感情を表現して、自分を守る力を喪失している。他者の要求を断る力を奪われていて、いとも簡単に他者の人格的、身体的侵入を許してしまうし、逆に相手に対する身体的、人格的攻撃を行う場合も少なくないと述べているが、アンケートはその状況を裏付けている。

## ・研究の目的

本研究の目的は、入所理由のほとんどが被虐待児であり、コミュニケーションが取れずいじめや喧嘩などのトラブルを起こす子どもたちが集団で生活するA施設で取り組んだソーシャルスキル・トレーニング「セカンドステップ」の効果を検証することである。平成17年度から3年間の状況を検証し、コミュニケーションの改善が問題行動の減少に繋がることを提示する。

「セカンドステップ」とは、アメリカで開発され、認知行動療法に基づいたソーシャルスキル・トレーニングのプログラムである。子どもの衝動的・攻撃的行動を和らげ、社会への適応力を高めることを目的としている。このプログラムを選んだ理由は、人が生きていく上でいかに自尊心が大切であるか、そしてその自尊心は「スキル」ではなく、「周囲の養育者の深い受け入れや愛情による結果」、「成長の段階で子どもが肯定的に発達していく結果」、育まれていくという認識にたって、指示的・禁止的接し方ではなく、「いっしょに考えていく」接し方によって、成り立っているからである。対人関係がうまく結べない子どもたち、自分の感情をうまく表現できない子ども、ささいなことで突然「キレル」子どもに「暴力以外の方法」で問題解決ができる様に支援する。日本ではNPO法人「日本こどものための委員会」(以下、CFCJ)が翻訳・出版・販売・研修・講義・実践等に関して、日本国内で行う権利を唯一認められている。プログラムの対象は4-8歳用、小学校各学年用・中学生用に分かれていて、年齢にあわせたプログラム内容で、それぞれの発達段階に期待される社会性を身に付けられるように構成された学習内容である。1回のレッスン時間は30分程度で28回のレッスンである。写真を見ながら、パペット、歌、ディスカッション、ロールプレイ等をして日常生活への展開を図るものである。28回のレッスンは3段階に分かれており、(1)相互の理解(他者の気持ちを感じ取る、他者の立場に立つ、思いやりを示す)(2)問題の解決(気持ちを落ち着ける、問題解決の方法を考える、方法の選び方、行儀よく話しかける等々)(3)怒りの扱い(怒りを自覚する、落ち着く、怒りを感じる場面設定での練習)となっている。

・研究方法

「セカンドステップ」導入について、職員全体で意思統一するのに半年協議を重ねた。施設長、親の同意を得て、子どもたちにも分かりやすく十分に話をして理解を得た。また、報告書・論文等の公表時には施設名や個人名などの情報が特定されないように守秘義務の遵守についても同意してもらった。細心の注意を払いながら、B生活寮全体で取り組むことにした。B生活寮の職員が全員研修を受けて実施の環境を整備した。

1. 対象

平成16年当時の小学1年生から4年生13名(以下、Cグループ)。小学5年生から6年生5名(以下、Dグループ)を対象とした。なお、入退所がありメンバーは増減するが、測定メンバーは3年間固定した。

2. 実施期間

平成17年度から平成19年までの3年間(1年で1クール)に3回実施した。

3. 時間帯

概ね16時30分から17時30分の間の30分間。学校から帰ってきて落ち着いたところを見計らって実施した。

4. 場所

教える場面と実践する場面を分離し、子どもたちのけじめをつけるために、教える場面は生活の場から離れた会議室を利用した。

5. 頻度

1週間に1回(夏休み等長期の休みは実施しない)。Cグループは毎週水曜日。Dグループは毎週木曜日。参加できなかった子どもについては職員がプログラムの内容を個人レッスンした。

6. スタッフ

Cグループを教えるスタッフは心理担当職員、B生活寮の児童担当職員及び筆者(寮長)3人を固定し、役割を交代で行った。1名はファシリテーター。1名は子どもたちの意見を黒板に書く。1名は子どもたちの把握である。Dグループを教えるスタッフは心理担当職員、B生活寮の児童担当職員2名の3人で行った。筆者はスーパーバイザーの役割を担った。B生活寮の児童担当職員(寮長含む)12名。心理担当職員2名は子どもたちと生活場面で実践する。話し合いなどの場面で自分の気持ちを言葉にして相手に伝える。喧嘩の時に、気持ちを落ち着かせて解決方法を見つけるなど日常生活で使用するのである。

7. 測定方法

客観的評価をするため、実践前と実践後にCBCLを使用した。CBCLは、アメリカで作られた「子どもの問題行動チェックリスト」(child behavior check list 以下、CBCL)であり、養育者(ここでは児童担当職員)が、生活場面で見る子どもたちの行動をチェックし、その行動傾向を探るものである。CBCLの尺度は、表1のとおりである。CBCLは、行動面だけではなく情緒面も含めた多面的・包括的な質問紙であり、家族や友達との関係性など生活状況も調べる項目もある。(表1)

今回は、CBCLを使用してCグループとDグループを合わせた18名を全体としたテスト(t検定)と尺度(T得点)をそれぞれ3年間の比較を実施した。プログラムの実施者と評価者は別であり、評価の客観性を担保した。

8. 日常生活の展開

レッスン後、子どもたちはB生活寮に戻る。B生

表1. CBCLの尺度

CBCL尺度	項目内容		
引きこもり尺度	引きこもる、喋ろうとしない	内向尺度	総 得 点
身体的訴え尺度	めまい、頭痛、腹痛など		
不安/抑うつ尺度	落ち込んでいる、自分に価値が無い、心配性		
社会性の問題尺度	行動が幼い、仲良く出来ない	外向尺度	
思考の問題尺度	強迫観念、強迫行為		
注意の問題尺度	不注意、落ち着きが無い、衝動的		
非行的行動尺度	嘘をつく、家出をする	外向尺度	
攻撃的行動尺度	言うことを聞かない、喧嘩をする、物を壊す		

活寮の児童担当職員が日常の生活の中で「セカンドステップ」を取り入れて子どもたちに対応していきやり方を実施した。子どもには日常生活でどのような出来事があったか、どのような気持ちだったか、相手はどのような気持ちだったか、うまくいきやり方だったのかなど話題にしていく。また、平成17年度及び平成18年度の実施後に子どもたちと職員へのアンケートをとり、B生活寮での日常生活の記録をとった。

子どもたちには、平成17年度実施後に再度いじめのアンケートを実施した。

研究結果

CBCLの主な個別基礎データ、テスト結果及び尺度による結果を提示する。

1. 主な個別基礎データ

改善が年度ごとにある子どももいれば変わらない子どももいる。項目によっては、初年度より得点が増える子どももいる。

2. テスト結果

実施前の平成16年度と実施後の平成17年度、平成18年度及び平成19年度をt検定にかけた。

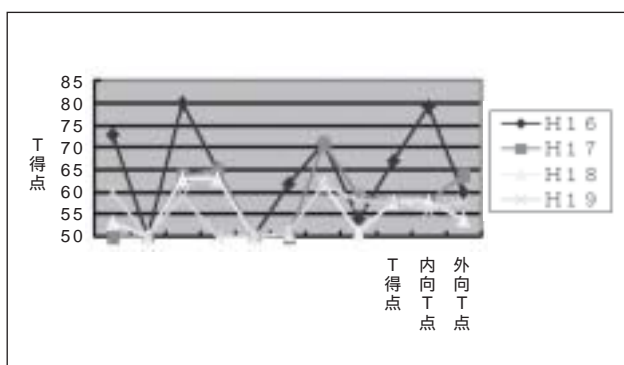


図1. Eさんの場合

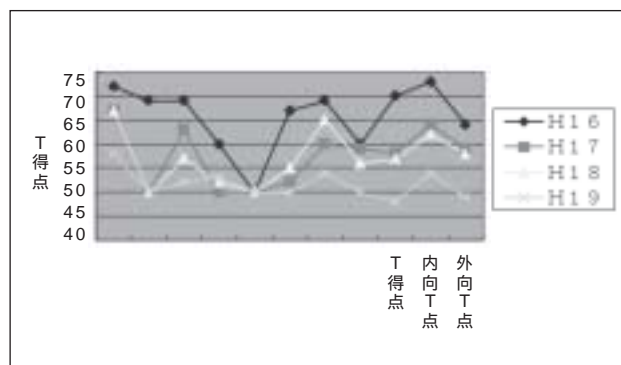


図4. Hさんの場合

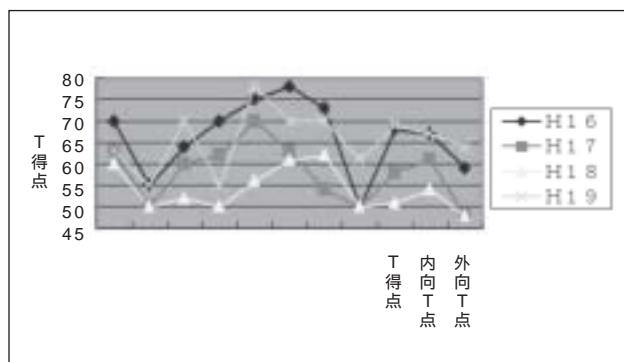


図2. Fさんの場合

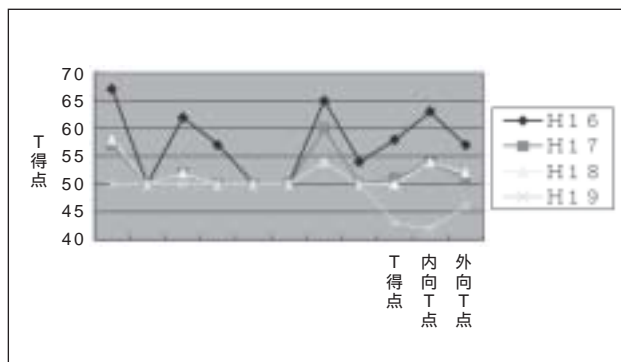


図5. Iさんの場合

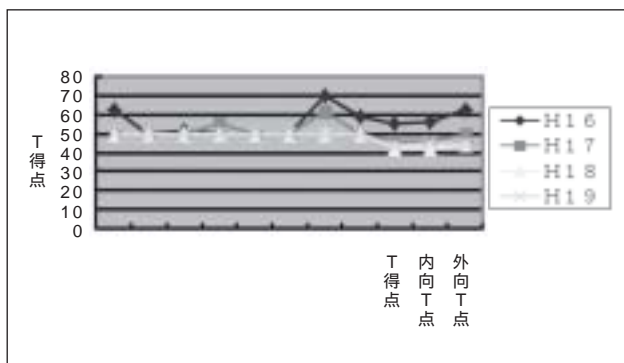


図3. Gさんの場合

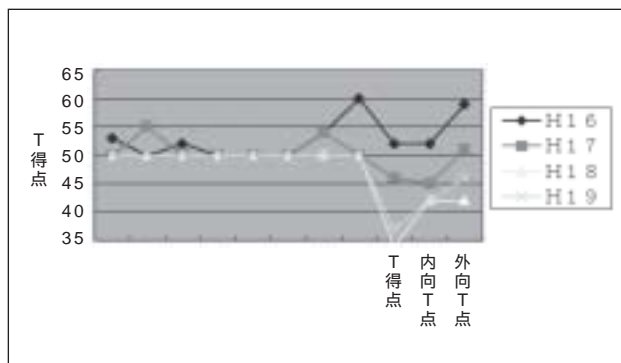


図6. Jさんの場合

1) 総得点について

平成16年度と平成17年度,平成18年度,平成19年度の平均値に差がみられるかについてt検定を実施した結果,各々に1%水準で有意差がみられた。平成17年度( $t(17) = 5.511, p < 0.01$ ),平成18年度( $t(15) = 4.183, p < 0.01$ ),平成19年度( $t(10) = 4.397, p < 0.01$ )と各年度かなりの高水準で有意性がみられたことになる。

2) 内向尺度について

平成16年度と平成17年度,平成18年度,平成19年度の平均値に差がみられるかについてt検定を実施した結果,各々に1%水準で有意差がみられた。平成17年度( $t(17) = 5.319, p < 0.01$ )平成18年度( $t(15) = 4.472, p < 0.01$ )平成19年度( $t(10) = 5.49, p < 0.01$ )と各年度かなり高い水準で有意性がみられたことになる。

3) 外向尺度について

平成16年度と平成17年度,平成18年度,平成19年度の平均値に差がみられるかについてt検定を実施した結果,平成17年度,平成18年度では5%水準で有意差がみられた。 $(t(17) = 2.781, p < 0.05)$ , $(t(15) = 2.184, p < 0.05)$ 。平成19年度では有

意性がやや傾向があるとみられた。 $(t(10) = 2.165, p < 0.1)$ 。

3. 尺度による結果

「セカンドステップ」を始める前と実施後の3年間をT得点で比較した。

外向尺度,内向尺度及び総得点では,T得点59点以下を正常域,60点から63点までを境界域,63点を超えると臨床域である。全体の平均では総得点の実施前16年度では臨床域であったが1年目に正常域になり,年々減少した。実施前の内向尺度は境界域であったが1年目に正常域になり,年々減少した。外向尺度は実施前が臨床域であったが1年目に正常域になり2年目も減少するが3年目に微増した。(表2)(図7)

考察

「セカンドステップ」の実践結果として,全学年の総得点のt検定ではかなり高い有意性が見られたことになり,3年間を通してもかなり高い水準で有意性が見られたことになる。すなわち,実践効果が総合的にあったと言える。

内向尺度では平成16年度を基準に各年度と比較するとそれぞれに1%水準で有意差がみられた。総合と同様にかなり高い有効性が見られたことになる。すなわち,内向性においてもかなり有効であったと言える。

外向尺度では平成17年度と平成18年度で大きな改善が見られ,平成19年度においては安定したということである。すなわち,効果はあったと言える。

以上のように全学年では,総得点と内向尺度においてかなりの効果があり,外向尺度でも効果があるという結果である。また,外向尺度より内向尺度の方が有意差は認められた。すなわち,全体としての効果と内向性の効果があると共に,全体や内向性ほどではないが外向性においても「セカンドステップ」は有効であると言える。

全学年のT得点での傾向としては,実施前の平成16年度と実施後1年目の平成17年度で改善が顕著であり,その後は安定したということである。

全学年のテストと尺度の考察として,総得点での減少は全体としての落ち着きを示す。内向尺度得点の減少の意味合いは,自分の「不安」感情を表現することで不安を軽減することにつながることにありと推測できる。さらにレッスンの中で手を挙げて発

表2. 全学年のT得点結果推移

全員	16年度	17年度	18年度	19年度
総合T得点	63.75	55.96	53.04	51.56
内向T得点	62.85	54.75	52.54	51.28
外向T得点	64.10	57.33	53.65	53.78

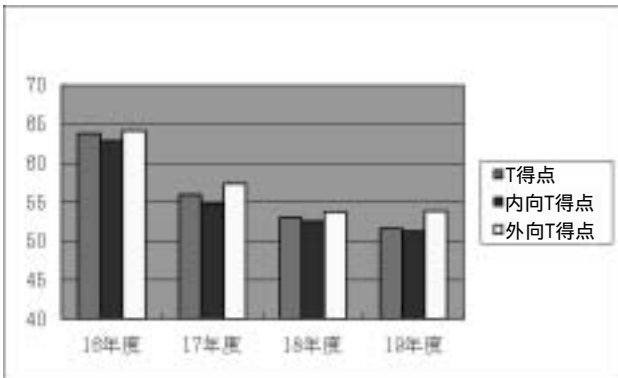


図7. 全学年のT得点結果推移



言し、その意見が否定されることなく受け入れられる体験を重ねることや、問題解決場面では自分たちで解決することができ、それを職員から褒めてもらえる体験を重ねたことが自信となり、内向尺度得点を引き下げる結果になったことも推測される。外向尺度得点の減少の意味合いは、人とうまく関わる方法や問題を解決させる方法を身につけ、認められた方法で自分の感情を表現できるようになることで、社会性の問題が減少した。その結果、人とのトラブルによるイライラが少なくなり、人間関係が円滑になることにあると推測できる。もし、このような行動変容が「セカンドステップ」を学んだことによると仮定すると、感情表現や葛藤場面の解決を学ぶことが不安や抑うつ減少に繋がったと言える。つまり、感情を表現することで不安が低くなり、葛藤場面の解決方法を学んだことにより、対処能力に自信が持てるようになり、その結果、不安が減少したと推定できる。先行研究として児童養護施設における小学生の攻撃性変容におけるセカンドステップの効果を検討した木村秀(2008)の研究では、攻撃性尺度と、社会性の問題尺度が使用されて、攻撃性が減少したと結論付けているが、本研究ではCBCLの尺度を全体に広げて調査すると攻撃性の属する外向性より内向性が有意なことが明らかになった。これは内面性が充実することで外向性が安定すると推測できる。

いじめのアンケートは平成17年度に平成16年度と同じ内容で実施した。C・Dグループの18名に実施した。18名から回答を得る。「いじめ」が「ある」と答えた子どもは18名中5名であり12名減っていた。「内容」(複数回答)は「悪口やかからかい」が5名、「いたずら」が1名、「いじわる」が3名である。特徴的なのは「いじめられてどうしたか」は、「やめるように言った」5名であり、「誰に相談したか」は「職員に言った」が5名であった。平成16年度では黙ってやられていて、だれにも相談しないで我慢していたことが多かったが、自分の気持ちを相手に伝え、職員に相談するなど問題の解決に至っている。これは、コミュニケーションの有効性が窺える。被虐待児は対人関係でつまづくが、自分自身の行動が対人関係において問題行動を起こしている、それをいじめととらえていることもいじめのアンケートから分かった。本施設の日常生活から、子どもたちに「セカンドステップ」のアンケートをしてみると、「セカンドステップをやってよかった」、「実際に使ってみたら旨くいった」とほぼ全員が答えている。

子どもたち自身が「セカンドステップ」の効果を実感しているのである。職員のアンケートからは「自分の気持ちを言葉にするということがうまく出来ている」、「子ども同士でトラブルを解決しようとしている。また、トラブルも格段に減ってきている」、「職員の話がよく伝わるようになった」など「セカンドステップ」を評価し子どもとの関係性が改善されたことを実感している。「セカンドステップ」を学校でも友達同士の喧嘩の場面で使って問題を解決している。「いじめやトラブルが減っている」と学校教諭からも報告があり職員も励みになった。そして、職員は一致団結して取り組むことで、日常での生活がスムーズで、統一した支援が可能となり、子どもたちと職員共に「セカンドステップ」の効果を実感している。職員は支援に自信を持ち、子どもたちも落ち着き、より良い関係が築き上がり、集団においても安定した。職員と子どもたちの日々のかかわりと信頼関係など「セカンドステップ」だけの成果ではないが、影響力は多大である。

日常生活でのセカンドステップの具体的な実践例を挙げてみる。「7名の児童が遊びをめぐってトラブルとなる。職員が間に入り、セカンドステップで考えることを提案する。何が原因だったか、どうしたらうまくいきそうか等、解決方法を促すと、2つの遊びについて時間を決めて順番にやろうというやり方を導き出すことが出来た。」また、「2名の児童が夕食は配膳時、順番を巡ってトラブル。職員がセカンドステップで解決を促す。「一人は横入りをした」、「一人は強く言い過ぎた」、「お互いに嫌な思いをした」、「謝る」と解決方法を導き出すことが出来る。」などの報告が職員からある。



写真1 生活寮の入り口ドアに貼られたセカンドステップのキーワード

子どもたちの変化のひとつに、自ら「カレンダー」や「キーワード」をドアや部屋に貼る(などして「セカンドステップ」に取り組む意欲と創意工夫が現れている。「B生活寮の日々の記録」の中にも子どもたちが職員と「セカンドステップ」を使用してお互いが理解し合い、児童担当職員が子どもを「かわいい」と思い、子どもが「うれしい」と感じる様子が記されている。これらは子どもたちが本来持っている



写真2 タンスに貼られたセカンドステップのキーワードと修了証

る育つ力が不全な状態から回復し、健全な人間関係を構築することが施設内の暮らし(日常性)の中で出来るようになったことの証であり児童臨床としてとても重要である。

被虐待児は安定した愛着関係を形成しづらい。また、仲間集団や友人関係の中に、お互いの人格を尊重し合う相互理解の関係が築きにくい。他者との関係はしばしば「支配-服従」の関係ないしは、お互いの優位を競い合うパワーゲームの関係になりやすい。コミュニケーションがうまくいかず、いらだちや内的葛藤を相手へのいじめや暴力の形で表出しがちであり、良好な人間関係が結びにくい。また、家庭内の虐待関係の「再現」していく形でしか人間関係を結べない場合が少なくない。被虐待児は、「いじめ・いじめられ関係」の中に巻き込まれやすい子

どもであると考えられる。このような子どもたちにソーシャルスキル・トレーニング(セカンドステップ)は有効であった。その効果の要因として、子どもたちに教えると共に児童担当職員の協力体制のもとに日常生活の中で実際に実践したことが考えられる。勿論、ソーシャルスキル・トレーニング(セカンドステップ)を実施してすべてが解決できる問題ではない。子どもを個別に心理面接や箱庭療法などの心理療法を行うと共に日常生活の場を治療の場として、ソーシャルスキル・トレーニング(セカンドステップ)を実践することが、より効果があると推察できる。子ども担当職員が替わったり、子ども集団が変わったり、生活の中でいろいろな要素が絡んでいく。安心と安全を確保しつつ、このような教育を被虐待児には実施していくことが必要である。

ソーシャルスキル・トレーニング(セカンドステップ)の実践を通して、健全なコミュニケーションを獲得することが、問題等を改善して良好な人間関係を築き上げるのに有効であることが明らかになった。少しでも心地よい人間関係が築ける術を持っていることは人生において価値のあることである。

#### 文 献

- 1) 尾関周二(1996)現代コミュニケーションと共生・共同, 青木書店.
- 2) 木村秀(2008)被虐待児への児童養護施設における環境療法. 淑徳大学大学院研究科研究紀要15:81-98.
- 3) 黒田郁夫(2005)子ども白書2005, 日本子どもを守る会編, p.151-152, 草土文化.
- 4) 楠凡之(2002)いじめと児童虐待の臨床教育学, p.92-104, ミネルヴァ書房.
- 5) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局(2009)児童養護施設入所児童等調査結果の概要(平成20年2月1日現在), p.10, 厚生労働省
- 6) 白石大介(1988)対人援助技術の実際 面接技法を中心に, 創元社.
- 7) 村山士郎(1996)いじめの世界が見えてきた, p.68-86, 大月書店.
- 8) 渡辺俊一, 井部文哉編集(2006)キレイな子どもを育てるセカンドステップ, p.8-22, 文修堂印刷.



**Problematic behaviors and communication  
- Practice and outcome of social skills training in foster homes -**

MIYAUCHI Shunichi

Nayoro City University Junior College

**Abstract:** The majority of children admitted to foster homes have ever been abused. Children who have been raised in the abuse setting are likely to repetitively have various behavioral problems because they cannot control their emotion and they yield to their impulses. Maltreated children and developmentally-disabled ones lack in communication skills, so they tend to create such problems in human relations as bullying and fights. We demonstrated that even children, in whom lots of these problems resided, could build successful human relationships through improving their environment and educating them on communication skills.

**Key words:** abuse, bullying, communication, social skills training, second step